

テキスト構造の観点から見た大過去形
－ 回想の半過去形に埋め込まれた大過去形 －

2025年9月20日（於青山学院大学）
日本フランス語学会第352回例会
宮脇 玲奈（関西学院大学 非常勤講師）

本発表では、Patrick Modiano の *Catherine Certitude* (1988) をコーパスとし、回想の半過去形に埋め込まれた大過去形の働きをテキスト構造の観点から明らかにすることを目指す。

まず初めに、Declerck (1991) の時間の支配領域を定める「中心場面」という概念を援用し、時制と中心場面の関係を論じる。そこで、中心場面と中心場面に対して時間的従属関係にある半過去形や大過去形のような相対時制との関係を確認する。

次に、テキスト構造と時制の関係を分析する。Weinrich (1982) によれば、物語は基本的に「導入部」「展開部」「終結部」の三構成からなり、各構成に時制の分布の偏りが見られるという。また浜田 (2001) の「境界表現」という概念を用いて、時制だけでなく時の副詞や提示詞もテキスト構造を分析するときに有効な指標となることも実例を通して論じる。

これらの概念を用いて、回想の半過去形に埋め込まれた大過去形を分析する。この大過去形が現れるテキスト構造は入れ子構造のようになっている。複合過去形や半過去形で描かれる過去の一時期の全体的な回想が外枠を作り、時の副詞 *Un jour* や *Un été* を境界表現として印象深い個別の思い出が導入され、これが内枠となる。研究対象となる大過去形は内枠部分に現れるが、この大過去形は基本的な機能である完了性や先行性を表さず、前景的な事態を表しているように見える。インフォーマントによると、大過去形を用いることで、物語の主軸ではない「副次的な物語」という印象があるという。これは複合過去形や単純過去形のような絶対時制だと新たな中心場面を設定して物語を前に進めてしまうが、相対時制である大過去形は本来的に中心場面を新たに設定する働きがないため、物語の時間を前に進めない「副次的な物語」として事態を表すことが可能であると考えられる。本発表では、このような大過去形を「擬似的前景を表す大過去形」と呼ぶ。大過去形と中心場面は基本的に時間的前後関係で表されるものであるが、このテキストにおいては入れ子構造という包含関係を表す特殊なテキスト構造となっているため、本来大過去形が持つ完了性や先行性という機能はキャンセルされていると考えられる。そのため、基本的に大過去形が必要とする中心場面はこのテキストにおいては存在しないと本発表では考える。

また、この大過去形は読み手に語り手の思い出を追体験しているような効果も与える。「過去における現在」とも言われる半過去形がこのテキストにおいて基調となる時制であり、半過去形の内的視点という特徴により境界表現となる時の副詞が疑似的な現在となるため、この時制を助動詞としてもつ大過去形が用いられることで、回想場面に立ち会っているような感覚を伴うのである。この境界表現以降のテキストは、背景には半過去形、前景には大過去形と役割が分けられているが、本来、完了性や先行性を表す大過去形が前景を表すのは、大過去形のもつ完了アスペクトが拡張的に解釈された結果である。

浜田秀 (2001) 「物語の四層構造」『認知科学』8-4, 319-326.

Declerck, R. (1991), *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Tokyo, Kaitakusha Co. (安井稔訳 (1995) 『現代英文法総論』 開拓社)

Weinrich, H. (1971), *Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, Stuttgart, W. Kohlhammer GmbH. (脇坂豊他訳 (1982) 『時制論 文学テキストの分析』 紀伊國屋書店)